

あ と が き

ヒューマンファクターの分野では「メンタルモデル」という概念がある。例えば、人がある問題に対処するとき、その問題の動作を自分なりにモデル化し、aという対応をすれば、結果はAとなると予測する。あるいは、bのボタンを押せば、結果はBとなると判断する、と言うように、人の判断や動作の根本的な部分でこのメンタルモデルが関わっている。やっかいなのは、理解度や環境、趣味などの違いにより、人それぞれに異なったメンタルモデルを持っている可能性があることである。正しくないモデルを持っている人は間違いを犯しやすいかもしれない。また違ったモデルを持っている人同士ではコミュニケーションがうまくいかないかも知れない。コンピュータソフトでもこのモデルは重要だ。最近の複雑なソフトなど、その設計者でなければ正確な動作原理は分からない。しかし、それでも自在に操作できるのは、使う側で、メンタルモデルを作り上げ、そのモデルに従って、理解しているからである。だから、使い慣れたソフトと違った概念で作ったソフトは使いづらい。従来のメンタルモデルではうまく理解できないからである。また、使う側にも、新しい概念に柔軟に対応するモデルを自分の中に作れないという問題があろう。特に、五十歳も過ぎると、その傾向が強くなるらしい。本屋でパソコン関連の本が無数に並んでいるのを見ても、自分がそのほとんどとは無関係だとの立場を固守している原因は、そんなところにあるなど実感している。

中川 庸雄

nakagawa@ndc.tokai.jaeri.go.jp

核データニュース編集委員会

中川 庸雄(委員長、原研)、井頭 政之(東工大)、岩本 修(原研)、喜多尾 憲助(データ工学)、長谷川 明(原研)、吉田 正(武蔵工大)